



Forestry of Chizu

# 智頭林業

みどりの風が吹く“疎開”のまち



智頭林業の明日を考える若手の会



Forestry of Chizu

# 智頭の森林



## 智頭町の概要

智頭町は、鳥取県の東南部に位置し、西と南は岡山県と接する山間地域である。本町の南部を中国山脈が走り、東山、沖ノ山、那岐山など1,300m内外の諸峰が急峻な地形を形成し、これより掌状に北股、新見の諸川が北流し、千代川となって日本海に注いでいる。

地質は、古生層基盤で花崗岩が広く覆っており、北西端に安山岩、東南端では、玄武岩、土壌は褐色森林土壌で造林適地である。

気温は、過去5年間では、最低-12.2℃、最高36.3℃であり、平均では13.3℃と比較的温暖である。降雨量も年間1,800mm内外に及んでおり、冬季の積雪は町の中心街で46cm、奥地で1.0~2.0mとなっている。

交通は、JR因美線、智頭急行智頭線がそれぞれ南北、南東に延び、また志戸坂峠道路、国道373号、国道53号、その他県道、町道などの各集落を結び、生活環境を至便なものにしている。

智頭町の土地利用状況をみると、総面積の94%を森林が占めている。

総面積 (ha)	22,461
森林 (ha)	21,103
うち民有林 (ha)	17,394
林野率	94.0
人工林率	76.94

資料：平成20年度鳥取県林業統計

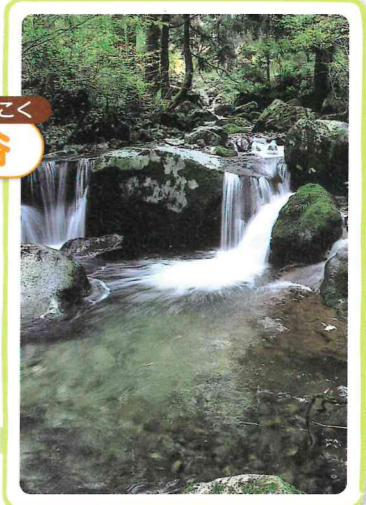
**智頭町の町章**  
智頭町の頭文字「チ」と杉を円形に図案化



すぎしんじや  
**杉神社**



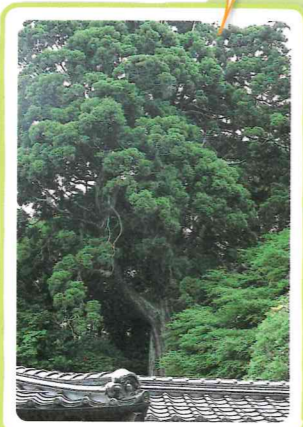
いたいばらしゅうらく  
**板井原集落**



あしすけいこく  
**芦津溪谷**

## 智頭町マップ

**豊乗寺の大杉**  
ぶじょうじのおおすぎ

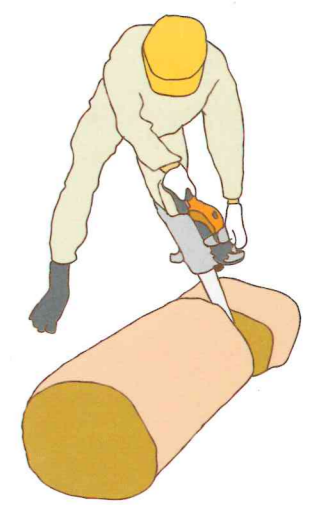


いしたりにんぎょうもくざいいちば  
**石谷林業木材市場**

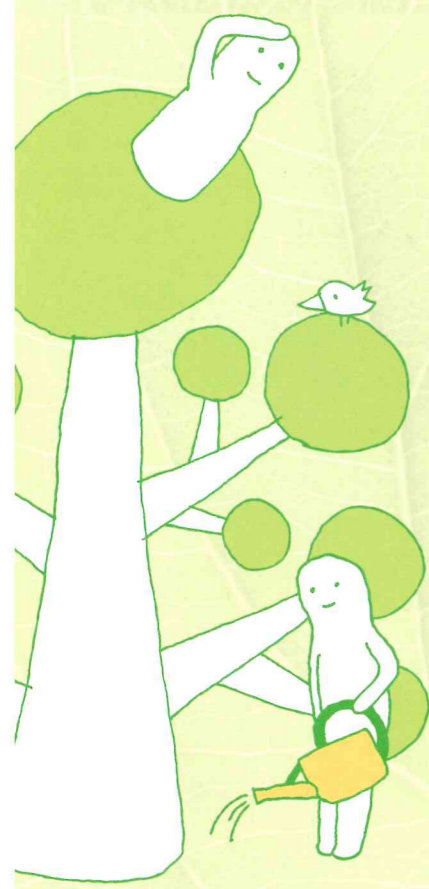
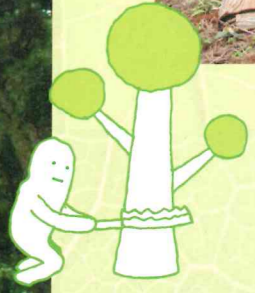


さくらとて  
**桜土手**

**智頭宿 (石谷家住宅)**  
ちつしゆく







みどりの風が吹く“疎開”のまち





ふるさとづくり計画

テーマ:

# 森林とともに暮らす。

～智頭林業の再生を目指して～

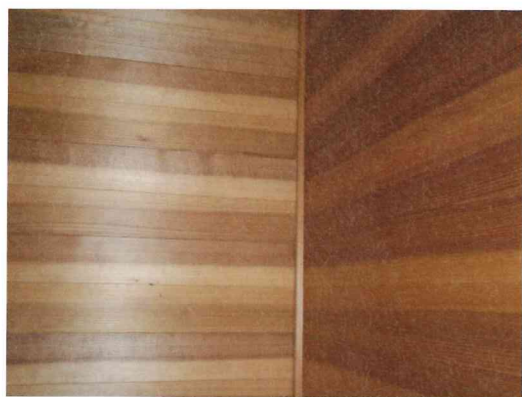
目標:

直面した林業の危機に手を拱いているだけでなく、林業の歴史や伝統、意匠などをイベントを通じて県内外へ広く発信すると同時に、森林が持つ「環境・健康」の側面からアプローチを試み、中長期的なプランで森林資源の魅力アップに繋げ、今回策定した「智頭林業・木材産業再生ビジョン」の実現を図る。

目標設定の考え方

智頭町は、岡山県に隣接する人口約8,500人の地域である。奈良時代から因幡地方と畿内を結ぶ交通の要衝地として、また江戸時代には、鳥取から江戸へ向かう参勤交代の宿場町として栄え、今でも往時の佇まいを色濃く残した町並み景観を活かした観光に取り組んでいる。

町の総面積の94%を森林で占める智頭町では、先代が育んだ森に暮らし、山を生業とし、木の恩恵を受けてきた。古くは江戸時代から造林の歴史によって培われた伝統的な育林後術と、育林に恵まれた気候条件のもとで、智頭林業は秋田や吉野、北山に並ぶ歴史ある先進地林業地として栄えた。



杉の赤目(心材)としらた(辺材)を生かした利用

智頭杉の特徴

木目が通直、材質緻密で赤みがやや黒いが淡紅色系を呈しており、特に冬目がしっかりして色と艶が良いことで造作材として関係者に高く評価されている。



「オウレン」  
オウレンはキンポウゲ科に属する植物で、薬用染料の原料として製成品が取り引きされている。室町時代の医師、岡田宗庵は因幡守護山名氏に仕えた後、この地に移り住み、オウレンを漢方薬として活用したといわれている。昭和50年頃まで智頭町山郷地区でのオウレン栽培は有名だった。

# 智頭林業

Forestry of Chizu



智頭林業の特色

① 品種

寛永年間の鳥取藩主池田侯は各地に山奉行をおいて造林奨励を行い、更に、文化、文政、天保年間では部落に世話役を置き、積極的な造林奨励を行った。

また、明治に入り天然スギによる赤挿苗が試みられたが、これがいわゆる沖ノ山スギと言われ大々的に普及した。

この沖ノ山スギは多くの品種系統が含まれており、大きく分けて①群スギ(群スギ、小群スギ)、②糸スギ(糸スギ、群糸スギ)、③カナメスギの系統5種類の分類されている。

したがって、天然スギの母材として数種の混成林である。

近年になって、天然スギの減少に伴い、穂木の採取が困難となって青挿苗にかわっている。

② 流通・生産

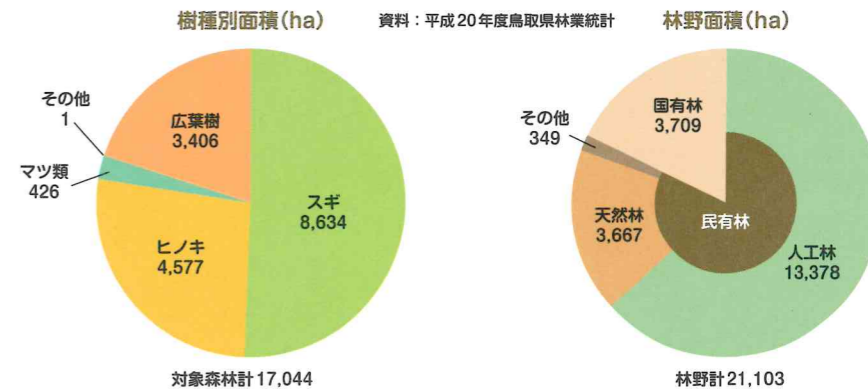
藩政時代から明治にかけては、地方の建築材ならびに樽丸材として千代川に筏を組み、鳥取まで流送していた。明治20年頃からは交通の便も開け、小車、馬車を利用するようになり、さらに大正12年国鉄因美線が貫通とともに、鉄道利用に変わっていった。しかし、現在ではそのすべてがトラック輸送となっている。

このように輸送方法や世相が変化するにつれて長伐期の樽丸生産から電柱材へ、それから一般用材と順次進展していった。

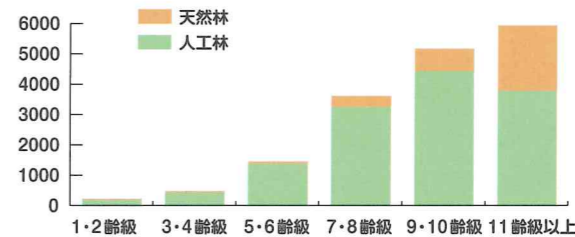
③ 枝打ち、間伐施業

植栽本数は1ha当たり3,000本～3,500本で、3～8年生まで雪起こしと、7～8年生までの下刈り、その後つる切り、除伐を行って、第1回の間伐を15～20年、第2回を25～30年、第3回を35～40年、第4回を45年生に集約的施業が行われており、主伐時期が到来するまで弱度の間伐をしている。

また、枝打ちは普通3～4回で間伐後に強度の枝打ちを実施するのが智頭林業の特徴である。



民有林の年齢別面積 (ha) 資料:平成18年度智頭町森林整備計画



智頭林業の施業基準

施業	実施年	備考
植栽本数		3,000～3,500本/ha
下刈	1～8年生	1～2回
雪起こし	3～8年生	1回
	9～20年生	現地の状況に応じ実施
	8～10年生	1回
	枝打ち	8～10年生
除伐	11～16年生	第1回(5m位まで)
	20～25年生	第2回(9m位まで)
	30～37年生	第3回(13m位まで)
	11～15年生	1回
間伐	15～20年生	第1回(本数率で15～10%)
	25～30年生	第2回(本数率で15～10%)
	35～40年生	第3回(本数率で15～10%)
	45年生	第4回(本数率で15～10%)
主伐	60～90年生	長伐期の場合 スギ 80年生 ヒノキ 90年生

